

器などの実用品であり、明確に用途が分かれている。このことはすでに鉄器導入後の金属のあり方だろう。鉄器製作は大陸部から導入され、当地で独自に発達したとする。またマレー半島からモルッカに至るインドネシア島嶼に1式銅鼓が分布するが、型式学的年代より実際にもちこまれた時期はずっと遅れることを述べる。型式学的年代とのずれをどう解釈するかは考古学的に厄介な問題であるが、島嶼部ではそのとおりであろう。最近銅鼓空白地域であったサバ北部の孤島で銅鼓が出土したが、鼓面が円形でない点を除けば1式銅鼓そっくりの銅鼓である。ところが一緒に出土した土器の型式学的年代からは10世紀ころとされるものであり、ベルウッドのいうような問題は想定しなければならない。

初版出版時にもふれられていたが、インドとの接触の問題がある。東南アジア各地からインド産の考古資料が出土している。特にインド産の土器の出土は年代的に確実におさえることが可能なために重要である。ジャワ北西部のブニ遺跡やバリ北岸のスムピラン遺跡からインド南部産の回転紋土器が出土している。インド、中国との関係については大陸部でもチャンパの遺跡やベトナム南部の諸遺跡から出土するスタンプ紋土器との関係で話題となっている。インド化、中国化といった古くからの問題を現代の問題にする話題である。西ジャワとインドとの交渉は、最古のサンスクリット碑文、プールナヴァルマン碑文により5世紀には確実であるが、回転紋土器はさらに古く、後1世紀にはインドとの交渉があったことを示すものである。ところがインド産のビーズを出土した西タイのバンドンターペット遺跡や、ホーチミン市南部のゾンカーヴォ遺跡でのC14年代値が前1千年紀前半～半ばという古さを示すために、ベルウッドはインドとの交渉の開始をそのころまでさかのぼらせているのは評価できない。両遺跡とも後1～2世紀の遺物をもつので、従来どおり回転紋土器の年代観、後1世紀以降でよいと思う。ベトナム中南部の近年の調査でもインドよりは中国との関係が初期には深く、後漢との関係を示す土器が出土している。むしろベルウッドの考え方で興味深いのは、インドとの交易活動の活発化により島嶼部どうしの交渉も生じ、その結果として初期金属器時代の島嶼部の土器が広範囲に同じ特徴を示すといっ

ていることである。

年代的にかなり明確に分かる大陸部とは異なり、島嶼部はひとまとめにできない複雑さがある。マレー半島、ジャワなどと、インドネシア東部の島々とは考古学的展開が大きく違っている。そのため体系化して記述するのは大変な苦勞がある。年代の判断に困る資料が多く、インドネシアの研究者のなかには我々なら時間的な違いと解釈する型式的な違いを、民族的な違いと解釈するという方法的な差もある。ベルウッドの本書はその困難さを承知のうえで記述されたものである。彼が記しているように、本書はひとつのモデルを提起したものであり、これからの研究の案内をなすものであり、将来の調査研究により変えられるものである。東南アジア考古学に関心をもつ人だけでなく、この地域に関心をもつすべての人にお勧めしたい。

本書と合わせて、ハイアムの前著および最近出版された *The Bronze Age of Southeast Asia* (Cambridge University Press, 1996) も読まれることをお勧めする。また1998年には日本の研究者の手になる東南アジア考古学の概説書(坂井隆・西村正雄・新田栄治『世界の考古学・東南アジア』同成社)が出版されるので、日本人研究者の見解とも合わせて比較するとおもしろいと思う。

(新田栄治・鹿児島大学)

Anthony Milner. *The Invention of Politics in Colonial Malaya: Contesting Nationalism and the Expansion of the Public Sphere*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. vii + 328p.

本書は、植民地時代のマラヤにおけるマレー政治思想史研究に、新たな分析視角を取り入れようとする意欲的な作品である。著者のアンソニー・ミルナーは、マレー語史料の綿密な読解に基づいたマレー社会の政治文化の研究に一貫して取り組んできた歴史学者として知られている。ミルナーの前著『クラジャアン』<sup>1)</sup>は、ナマ(nama, 名声)を高める

1) Milner, A. C. 1982. *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*. Tucson, Arizona: The University of Arizona Press.

という動機のもとに、儀礼的で象徴的な権威の中心であるラジャ (raja, 王) 個人に臣下が忠誠を誓っている状況が、植民地化以前のマレー王権社会の本質だと結論づけた。前著の続編といってもよい本書で問われるのは、植民地時代のマラヤのマレー社会において、どのようにして、前近代的性格を持つクラジャアン (kerajaan) の政治文化が掘り崩され、近代的な「政治」——自由かつ理性的な個人からなる公共社会のなかでの利益の追求をめぐる多元的主体の競争的活動——が創造されていくのか、ということである。

ミルナーは、ウィリアム・R・ロフ (William R. Roff) の『マレー・ナショナリズムの起源』<sup>2)</sup>をはじめとする先行のマレー史研究が、ナショナリズムの発展史を跡づけるという目的の下に、マレー社会におけるイデオロギー的な統一や合意の側面に関心を集中させていたことの問題性を指摘する。著者が提唱するのは、ナショナリズムを相対化し、マレー社会におけるイデオロギー的な分裂や論争の側面に光を当てることである。

本書では、各章ごとに1ないし数編のマレー語文献の分析を中心に議論が展開される。著者が意図するのは、個々のテキストの中に見られる言語表現に細心の注意を払うとともに、個々のテキストを過去や同時代のテキストとの対話関係 (相互テキスト性) において理解し、各テキスト間のイデオロギー的な連鎖をつかみとることにほかならない。本書で取り上げる諸テキストの総体が構成しているのは、ラジャへの忠誠に依拠するクラジャアン志向、マレー民族にアイデンティティの基盤を置くバンサ (bangsa) 志向、イスラーム共同体への奉仕を説くウンマ (umat) 志向という、植民地時代のマラヤのマレー社会における共同体概念をめぐる主要なイデオロギーのあいだの三つ巴の論争である。ミルナーは、これらのイデオロギーの間に存在する相違をふたつのレベルに分けて考えようとする。すなわち、個々のイデオロギーの具体的な主張に関わる problematic なレベルと、そうした主張の根拠となる問

題設定や正統性原理に関わる thematic なレベルという、ふたつの層に分けて、植民地期のマラヤにおけるイデオロギー的論争を理解しようというのである。

本書の第1章から第5章までのところでは、19世紀中頃から20世紀初頭にかけて、西洋のリベラリズムの強い影響のなかで展開されたバンサ志向の議論が分析される。取り上げられるテキストは、アブドゥッラー・アブドゥル・カディール (Abdullah Abdul Kadir あるいは Munshi Abdullah) の自伝や旅行記 (第1・2章)、イギリス人のプロテスタント宣教師ベンジャミン・キーズベリー (Benjamin Keasberry) が出版した地理教科書 (第3章)、モハマド・ユーノス・アブドゥッラー (Mohd. Eunus Abdullah) が編集するマレー語日刊紙『ウトゥサン・ムラユ (Utusan Melayu)』 (第4・5章) である。これらのテキストの革新性は、クラジャアンの正統性を覆しかねない諸概念、すなわち、民族 (バンサ) 意識を筆頭に、領域国家 (ヌグリ, negeri) の観念、ラジャ個人から切り離された非人格的な「クラジャアン=政府」という解釈、理性主義、個人主義、進歩史観などの革新的な諸概念を生み出した点にあるという。

第6章と第7章では、20世紀初頭、アラブのイスラーム改革思想の影響を受けたウンマ志向のジャーナリスト4人が編集した『アル・イマーム (Al Imam)』紙が考察の対象とされる。同紙は、理性をはじめとする個人の本質の重視、イスラーム共同体 (ウンマ) への奉仕、イスラーム法への服従などの主張を掲げて、クラジャアン体制に挑戦した。ウンマ志向は、理性主義や進歩史観を有する点ではバンサ志向と共通する部分があったという。

第8章では、バンサ志向やウンマ志向の挑戦を受けて、新たに自己改革に乗り出した20世紀初頭のクラジャアンのテキストとして、ハジ・モハマド・サイード (Haji Mohd. Said) の『ヒカヤット・ジョホール (Hikayat Johor)』が分析される。同書が従来のクラジャアンの歴史書とは決定的に異なっているのは、近代性の積極的評価、人種・民族 (バンサ) と領域国家 (ヌグリ) を単位とする世界観の受容、ラジャ個人と区別された「クラジャアン=政府」概念の採用、ラジャへの無条件の忠誠から業績主義に基

2) Roff, William R. 1994 [1967]. *The Origins of Malay Nationalism*, second edition. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

づく条件付きの忠誠への転換、等々のイデオロギー的革新を行っている点にあるという。

以上の植民地時代前期の議論を受けて、第9章と第10章では、植民地時代中期の1930年代以降の論争が俎上に載せられる。まず、ウンマ志向のテキストとして、サイド・シェイク・アルハディ (Sayyid Shaykh Al-Hadi) の『イスラームと理性 (*Islam dan 'Akal*)』が、続いて、クラジャアン志向のテキストとして、ラジャ・ロブ・アフマッド (Raja Lob Ahmad) が編集したペラのスルタン・アブドゥル・アジズの即位記が、それぞれ分析の対象となる (第9章)。ミルナーによれば、このふたつのテキストは、具体的な主張は異にしているものの、進歩や近代化、バンサの統一といった課題の設定や正当化の論理においては、もはやバンサ志向のリベラリズムの言説の枠組みのなかに取り込まれているという。最後に、イブラヒム・ヤーコブ (Ibrahim Yaacob) の『祖国を見る (*Melihat Tanah Ayer*)』は、一方で、マレー民族 (バンサ・ムラユ) とマレー人の国土 (タナー・ムラユ) とを感情的に結びつけ、バンサ志向のイデオロギーを発展・強化させるとともに、他方で、植民地経済体制に起因する経済的抑圧からのマレー人の解放に主眼を置く社会主義的なバンサ志向を打ち出し、個人主義のリベラリズムに立脚した既存のバンサ志向を修正した (第10章)。このような紆余曲折を経ながら、バンサ志向イデオロギーは、徐々に「ナショナリズム」としての内実を備えるようになっていった。

ミルナーの結論をまとめてみよう。第1に、具体的な主張のレベル、すなわち problematic なレベルにおいては、マレー人社会の諸イデオロギー——クラジャアン志向、バンサ志向、ウンマ志向——は相異なる共同体概念を掲げて対立を続けていた。しかしながら、第2に、論争で使用された語彙、問題設定、正当化原理などのレベル、すなわち thematic なレベルにおいて見るなら、相互に敵対するイデオロギーがますます共通の論争のルールのもとに議論を闘わせるようになってきた。その論争のルールとは、理性、進歩、平等、自由などの語彙、バンサの統一と発展という課題の設定、実証的な方法による議論の正当化など、もとはといえばバンサ志向が用意した議論の作法であった。このようにして、相異なる

理想の共同体像を掲げる複数の主体が、新しい共通のルールの下で公的な議論を重ねていく過程において、公衆 (public) が開かれた論争の場としての公共圏 (public sphere) が拡大していく。ここにミルナーは近代的な「政治」の創造を見るのである。

本書のマレー政治思想史研究への貢献は、第1に、ナショナリズムを相対化したうえで、ナショナリズムの出現の前提条件をなす近代的世界観の成立過程を追求したことにある。しかも、著者は、近代的世界観の形成を単なる西洋思想の一方的な伝播によって説明することを慎重に避け、マレー王権制に代表される内の論理と、ヨーロッパの啓蒙主義思想やアラブのイスラーム改革思想などの外の論理との相互作用の中に、植民地時代のマレー社会における近代的な政治空間の生成のダイナミズムを見ようとしている。第2の貢献は、政治的な議論のもつイデオロギー的統合作用を積極的に評価した点である。異なったイデオロギーのあいだの論争は、表面的には、個々の主張の相違を浮き彫りにすることによって相互の対立を激化させるように見えるけれども、深層においては、共通の語彙や主題、正当化原理などの共通の議論のルールを発達させることを通じて、対立を緩和し統合を促進する可能性を秘めている。

本書に関する問題としては、次のような諸点を指摘しておきたい。第1は、「植民地期マラヤにおける政治の創造」という本書の主題における「政治」の定義の問題である。「政治」を近代的概念としての政治に限定するミルナーの定義そのものに同意しない読者は、植民地時代に生じた変化は政治の「創造」ではなく、古いタイプの政治から新しいタイプの政治への転換、ないしは政治領域の拡大に過ぎないと感じるであろう。第2の問題は、論争を構成する諸々のイデオロギーのあいだの相互関係が明確ではない点である。そもそも、彼のいう「論争」とは、論者差し向かいの討論や同一の紙 (誌) 上での論戦ではなく、時代的にも空間的にも隔たった論者たちが各々のテキストを通じて間接的に行った (と推定される) 議論である。当事者が先行のテキストにどれほど影響を受けたかを実証的に跡づけるのは容易でない。そのため、個々のイデオロギーのあいだの連鎖関係についての説明は、推論的で仮説的な性格が

濃い。第3の問題は、イデオロギーの流通範囲や受容のされ方が明らかでない点である。すなわち、それぞれのテキストが誰によってどのように読まれ、いかなる反応を引き起こしたのか、という問いに対するミルナーの説明もまた、十分な裏付けを欠き、推測の域を出ていない。

以上のような問題点を考慮に入れても、植民地時代のマレー政治思想史の再考を促す問題提起の書としての本書の重要性は、依然として失われまいであろう。そればかりではない。本書の結論部分でミルナーが示唆しているように、本書の議論は、独立以降のマレーシア政治を考察する際の重要なヒントをも与えてくれるといえよう。もちろん、現代マレー

シア政治を論ずる場合には、新たな問題、たとえば、非マレー人をいかにして論争主体として取り込むべきか、テキストとしての政治思想と現実の政治行動をどのように接合するか、等々の課題が立ちはだかっている。いうまでもなく、本書はそのような問題に直接の解答を与えてくれるわけではない。しかし、ミルナーのひそみにならうというならば、彼の論を支持するか否かに関わらず、我々が本書を相手に真剣な対話や論争を挑むことは、現代マレーシア政治の構図を捉える視角と方法を身につけるうえでも、決して無益な作業ではないであろう。

(左右田直規・京都大学人間・環境学研究所)